

世界中の人々に「幸せ」を届ける： Happy Japanのブランド設計

オリジナルブランドの家庭用ミシンを立ち上げたHappy Japanは、アメリカとヨーロッパを視野に入れ、グローバルな成長を目指している。文＝アーサー・メンケス

「世界中の人々に幸せを届ける先進技術の開発を先導する」ことをミッションに掲げるHappy Japanは、日本の製造業の優れた象徴ともいえる存在だ。

1923年に創業した山形県本社の同社は、優れたユーザー体験を提供する高品質な製品群を次々と生み出しており、その製品ポートフォリオは今も拡大し続けている。



スムーズな操作性を誇る家庭用ミシンから、業界標準をリードする産業用刺繍機、そして最先端のIC検査装置まで、Happy Japanの技術力は多岐にわたり、卓越した特長が全製品に宿っている。

これらの世界水準を実現している鍵は、「モノづくり」への徹底したこだわりだ。これは日本独自の製造哲学であり、卓越した職人技と品質を追求する姿勢を意味する。

「日本のモノづくりの最大の強みは、お客様の細かなニーズにびたりと応える製品を創出できることにあります。高い満足度を実現できるのです」と、原田氏は語る。

「高品質な製品を生産しつつ、コストを抑えて手の届やすい価格にすること。そして生産工程の標準化によって、効率的な製造体制を実現すること。この3つの要素が合わさることで、モノづくりの力が発揮されるのです。」

Happy Japanの家庭用ミシンは、顧客の使用感を徹底的に追求した成果として、その姿勢を象徴する製品となっている。



「当社のミシンの特長は、非常に静音性が高く、ユーザーにとって快適でやさしい縫製体験を提供できる点です」と原田。「一般的なミシンは60デシベル後半で動作しますが、当社の製品は60デシベル前半で稼働します。今後はさらにこれを60デシベル未満にするため、研究開発投資を続けています。」

「また、当社独自の布送り技術も大きな強みです。生地の厚みにかかわらず、常にスムーズで安定した縫い目を実現できるため、極薄素材から厚手の布まで、あらゆる素材に柔軟に対応できます。」

2021年、同社はOEM（相手先ブランド製造）中心の体制から転換し、自社オリジナルブランド「Happy Japan」ミシンを立ち上げ、国際的な認知度向上に注力し始めた。

「日本国内では家庭用ミシンの需要が非常に低迷しています」と原田は明かす。「一方で、米国やヨーロッパなどの海外市場では依然として根強い需要があり、当社はこれらの地域への輸出拡大に注力しています。」

また、Happy Japanの最先端の産業用設備も、同社の継続的な成長戦略において欠かせない要素となっている。

高い耐久性と振動のない構造を備えた刺繍機には、業界でも屈指の出力を誇るモーターが搭載されており、直感的に操作できる制御パネルも備えている。12種類の刺繍を同時に縫製できるモデルも用意されている。

これらの刺繍機も、家庭用ミシンと同様に、社内の研究開発部門により日々改良が続けられている。さらに、Happy Japanが近年注力しているのがIC（集積回路）検査装置であり、これは半導体業界への展開の中心を成している。

同社のICハンドラーは、高速性、正確性、繊細な動作を兼ね備えており、微細なICチップの取り扱いにおいて不可欠な特性を実現している。

「当社のICハンドラーは、各ICが良品か不良品かを最終検査する装置ですが、世界最速の処理性能を誇ります」と原田は強調する。「しかも、ICを傷つけないよう非常にやさしい動作機構を採用しています。他社製の装置では、正常なICを誤って不良品と判定してしまうこともありますが、当社の装置はそのような誤判定を防ぎ、正確に検出・合格させます。」

さらに、ICハンドラーの設計は自動化が進んでおり、1人のオペレーターが数十台の装置を同時に監視することが可能だ。「切り替え時間は最小限、ダウンタイムはゼロに抑え、シームレスな稼働と最大の生産効率を実現しています」と原田は語る。



刺繍機（8頭機モデル）



ICハンドラー



「モノづくりの力とは、品質・コスト効率・業務遂行力の三位一体によって生まれます。」

—— 株式会社ハッピージャパンCEO 原田 啓太郎

AIや電気自動車といった成長分野を支える半導体産業の中核を担うICチップ。その分野において、Happy Japanは今後もICハンドラーへの投資を一層強化していく方針だ。

「この事業を、今後の当社の中核事業のひとつとしてさらに強化していく考えです」と原田氏は締めくくった。